

---

die and locus \* side stories \*

ナナエ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

die and locus \* side stories \*

### 【Nコード】

N6308W

### 【作者名】

ナナエ

### 【あらすじ】

本編「die and locus」の番外編です。本編では触れられなかった物語が見られます。あるとき、あの人は一体何をしていたのか？そういったことが物語の中心。短編集的なものでもあります。これを読まなくても本編を読むには何も支障はありません。

SS1 His mother is dead . . . (前書き)

本編「die and locus」において、「Beginning is ZERO of number.1」の後から、「Beginning is ZERO of number.3」までの間で、恋次が、落ち込み状態 復活で浦原商店へ、という状況でした。その間、恋次に何があつたのかの物語です。

これからどうする？

同じことを延々と考えながら、空見山をおりてから町中をあてもなくうろついていた。

井上や石田、茶渡の家にも訪れてみようか。それとも、胡散臭い元十二番隊隊長のところへ？

行ってどうする？

何も情報はない。またグダグダと話して終わるに決まっている。浦原商店など、連れ戻される罠が張られている危険性が高いことこの上ない。

じゃあ、何処に行く？

ルキアが連れ戻された。話し合う相手がいない。

一人で何をする？ どうするべきだろう？

どうしたらいい？

まだまともに話したことのない、有沢や浅野のところに行って、情報を収集するか。

こんな曖昧な状態で、無駄に動き回るのは吉ではないか。いつそストレス発散にでも、虚を斃したいと思うが、そうしたら霊圧を出すことになってしまい、尸魂界に見つかる恐れがある。厄介な者として、十二番隊は勿論、碎蜂や夜光がいる。霊圧を察知されてしまえば、すぐにでもやってくるだろう。

まとまらない思考に苛立ちつつ、町の角を曲がった。

「……………ん？」

ある川原が視界に入った。否、瞳に映ったのは、川原ばかりでなく、そこに立つ一人の女性もだった。

とくに何もすることのなかった恋次は、彼女に近づいていった。

女性が気配に気付き、振り向く。

「あなた…」

「よう。何してんだ？ こんなトコで。えーっと…あ、あり…」

彼女が苦笑する。

「有沢竜貴、だよ。恋次」

恋次が目を丸くする。

彼女とまともに顔を合わせたのは、数日前にルキアと、一護のことを話しに行ったときが最初だ。名前を名乗った記憶はなかった。

「一護から聞いてたよ、朽木さんの幼なじみなんだってね」

そう。藍染との戦いのとき、巻き込まれてしまったたつき達は、死神の力を失った一護から、それまでにあつた全てのことを聞いていた。

自分が死神になった経緯に、石田も滅却師クインシーということ。ルキアが死神の力を譲渡したせいで、罪人として尸魂界に連れ戻されたこと。その彼女の処刑を止めるために、夏休みを費やして尸魂界に向かったこと。それに、力に目覚めた織姫や茶渡、仲間になった石田がついてきたこと。ルキアを助けるまでの戦いの数々。その中、恋次は誰よりも彼女を助けたいと思っていたこと。処刑の裏に、藍染が存在したことから、破面の襲来、自身の中に潜んでいた虚、織姫が連れ去られた出来事、そして、あの最後の戦いまでの全て。

「…本っ当…強いんだか、弱いんだか」

たつきは息を吐き出した。

不思議そうにしている恋次をチラリと見やる。

「一護って、あたしと同じ空手の道場に、ガキの頃来ててさ。そんなときのあいつ、ヒョロヒョロでヘラヘラしてて、スッゲー弱そうな

わけ。実際、軽い上段一発で、あいつすぐに泣くんだ」

信じられない話だった。あの一護が、小さい頃は泣き虫だったなんて、ちよつと想像できない。

青空を見上げ、目を細める。

「…何でここにいるのかって、言ったよね？」

たつきの瞳が、憂いに帯びていることに気付き、恋次は少し戸惑う。自分は訊いてはいけないことでも訊いたのだろうか。

「……………あいつはお母さんにベツタリだった。さっき、一護は小さい頃、すぐに泣く奴だったって言ったけど、お母さんみるとすぐに笑うの」

嫌いだった。

男のくせに、負けても母親を見るだけで笑顔になる、あのオレンジ頭の子供がムカついた。

ヘラヘラすんな…って、笑顔を見てると殴ってやりたくなった。

それくらい、大嫌いだった。

「本当に、楽しそうに笑うんだ…いつつもね」

足元に落ちていた小石を拾い、川に放る。

ポチャン、と音を立てて、消えた。

「九歳ん時に、あいつはまだお母さんベツタリの甘えん坊で、どうしようもない奴だったんだけどさ」

風が吹きぬけていく。彼女の長い髪が揺れる。

「その、九歳ん時にね、あいつのお母さんが死んだの」

恋次の目が、ゆっくりと見開かれる。初耳だった。

「好きで好きで、仕方なかったあいつのお母さんが、あいつの目の前で、この川原で死んだの」

悲しげに笑い、目を伏せた。

「次の日から、あいつ学校休んでさ。何処にいるんだろうと思ったら、ここに来てた。ランドセル背負って、お母さん捜すみたいにウロウロ、で、疲れたらしゃがみこんで、またウロウロ。その繰り返し。毎日毎日、ずーっと、ずーっと…、見てらんなかったよ、あん

ときの一護は「

『一護っ！！』

少年が振り向き、力なく笑う。

『たつきちゃん…どうしたのさ、こんなところに』

走ってきたせいで、肩で息をしている状態だ。

ランドセルがカチャカチャと音を立てる。

『……何で、笑ってんの、あんた…？』

『何で…っ？』

ムカついた。これまでにないくらいに。

ガッ！！！

力いっぱい、一護の頬を殴ってやった。なのに。

『いってて…いきなりは、酷いって…たつきちゃん……』

何で？ 一護…こんなの、変。

『何で……泣かないんだよ……』

『え……』

『前のおんたなら、今の受けて大声で泣いてるはずじゃねえのかよ！！！』

泣くと思ったのに。だって、お母さんが生きてたときは、ちよっ

と小突いただけでも泣いてたじゃないか。何でヘラヘラしてんの？

何で泣かないわけ？ こんなの、一護じゃない。あたしの知って

る一護は、お母さん大好きで、泣き虫で、男のくせに情けなくて、

バカみたいに弱くて、すぐにニコニコ笑う奴だ。

『えっ、と…その…ごめん』

謝罪なんて、嬉しくなかった。

嫌いだ。こんな一護。嫌い、嫌い！ 嫌い！！

大っ嫌い！！！！

「…毎年、そのお母さんが死んだ日だけ、一護は家族と墓参りで学校休んでた。…ただ」

恋次に向き直る。

「四年前っていうか、もう五年前だけど。高一のとき、一護は命日の次の日も学校休んだんだ」

高一の初めの方だとすると、それは…、

「丁度、ルキアが現世で、一護と一緒にいた頃か？」

「そ。つまり、あいつが朽木さんから死神の力を貰って、あんま経ってない頃ね」

あの日、たつきは自主早退して、この川原を訪れた。そこには、制服を着ているにも関わらず学校には登校していない、オレンジ頭の高校生の姿があった。会話はしたけれど、一護は母のことを何も口にしなかった。

「強い顔だったよ。そんなときのあいつは」

中学まで、ずっと一護は自責の念にはかり駆られていて、彼は隠しているつもりだったのだろうが、よく知るたつきからは理解できなかった。

俺のせいなんだ。俺の…俺の、せい…

そんな声が聞こえてきてしまうくらいに。

「まあ、四年や五年経ってもあいつはやっぱり自分を責めてたんだけど。でも…それが、一護だし」

まるで単語がたりない言葉だが、たつきの言いたいことはよく分かった。“黒崎一護”は、そういう男なのだ。

たつきは、一護からその母の死は、グランドフィッシャーという虚に殺されたという事実があったことも聞いていたが、彼は最後にこう付け足した。「畏にはまったのは俺だから、結局殺したのは俺だったんだけど」と。

一護らしい、と思いつつも、「バカじゃないの」と彼の脳天を殴ってやった。

彼女は、深く深呼吸する。

「…織姫から聞いた。一護、あの破面アラシカルつてのと同じ姿で、こないだ出てきたんだろ？」

言われて、恋次は思わず胸の辺りに手をやった。この辺りを、たしか深く斬りつけられたのだ。眉一つ動かさず、動揺すらしなかった彼に。

「ああ…俺達のことも、分かってなかったぜ」

「で、朽木さんもいなくなっただっていうダブルで、凹んでブラついてたってわけ」

呆れ顔のたつきに、何も言い返せない。凶星である。

「情けない。朽木さんはあんたに託して尸魂界に連れ戻されたわけでしょ？ そんなんでいいの？」

「うるせえな…」

舌打ちし、顔を背ける。

「…寝ぼけてんなら、たたき起こせばいいだけの話でしょ」

たつきははつきりと言った。

「無理矢理にでも、起こせばいいのよ。あいつはバカだけど、でも、あたしは小っさい頃から知ってる」

ニツと笑った彼女は、根拠のない自信に溢れていた。

「一護は友達を忘れるほどのバカじゃないよ！」

その通りだ。

恋次は口角を吊り上げた。そう、落ち込んでいる場合でもなければ、悩んで迷う余裕もないのだ。

「…ありがとよ！ 有沢！」

そして彼は、たつきに背を向けて走り去っていく。

それを見つめていたたつきは、腰に手をやって、呆れ顔で微笑んだ。

「…織姫の言うとおりだなア…あいつ、本当に一護に…そっくりだ」

たつきは空を見上げる。

…一護。勝手に死んだっただけでも許せないのに、友達を忘れるってどういうことさ。あんたそこまで、バカじゃないだろ？

…一護。あんたの友達は、皆必死になってるんだ。だから、絶対に戻ってきてよ。

それで、一発、その顔面を殴らせる。

それで、長いこと見せなかつた泣き顔を見せてみる。

ほら。

あんたの友達、すごい頑張ってるんだから。

SS1 His mother is dead... (後書き)

初・番外編でございます。

恋次とたつきという不思議な組み合わせでありました。いかがでしたでしょうか。

いえね。恋次もあんなに一護と一緒にいたんだから、彼も一護の過去を知っていていい存在なんじゃないかな、と思ったのです。ルキアから聞いて知ってましたとか、そういう設定はつまらないからしてません。原作でもしそういう設定してあつたら…はは、まあ仕方ないか。

ところで小学五年生になるまで、一護はたつきのことを「たつきちゃん」と呼んでいるのですが、これが激しく書きにくい。ていうか「たつきちゃん」から「たつき」に呼び名が変わったっていうエピソードも、恋次に教えたかったなあ。話がまとまらなくなっちゃって断念したんですけど。

すみません、高校の文化祭準備の合間合間で書いたものなので、誤字があるかと思えますし内容も雑かもしれませんが一承ください。いずれ修正いたします。

あと補足。恋次が走り去っていきましたが、その行き先は無論浦原商店ということになります。で、「Beginning is ZERO of number 3」の浦原商店のシーンに続くんですね！分かりにくくてすみません。

感想等お待ちしております！

## SS2 I know? (前書き)

一護が破面となった状態で意識を保って数日後のお話。本編より前か、ギリギリ本編に入るか、くらいの微妙な時期です。

## SS2 I know?

石造りの建物の屋上で、一護は一人、灰色の空を眺めていた。

ウエコムンド  
虚圏の空は、これが常である。青空は見られない。あつたとしても、それは仮初のもので、本当に青空には程遠い。同じ理由で太陽も昇らない。唯一、淋しく虚圏の砂漠を青白く照らし出す月ばかりが、そこに浮かぶ。

「ナリア兄ちゃん？」

声をかけられた。だが、彼は振り返らなかった。

「ナリア？ どうした？」

ガレットも声をかけたが、振り返らない。

ユウと顔を見合わせて、二人は揃って首をかしげた。

ガレットはユウの手をひいて一護の真後ろにまでやってくると、背中をポンと叩いてみた。

「うわっ!？」

反射的に、一護が振り向く。瞳を瞬かせながら、狼狽しつつ口を開く。

「おま…が、ガレットに、ユウ…！ 脅かすなっ!!！」

「脅かしてないもん！ ナリア兄ちゃんが無視するのが悪いんだもん！」

「あ……………」

そこで、彼の表情が曇る。

「なんだよ、その“今初めて無視していたことに気付きました”、みたいな顔は」

ガレットも渋面でこちらを見ている。

ナリア。

一護が頭に手をやり、瞳を揺らす。

なんだか様子がおかしい彼に、二人は再度声をかける。

「ナリア？」

「ナリア兄ちゃん？」

無意識のうちに、体を震わせている。

「お……俺……」

ガレットが眉間に皺を寄せる。どうしたのだろう、こいつは？

「俺……ナリア、なんだよな……？」

「は？」

恐る恐る顔を上げ、縋るようにして自分のことを見つめてくる。

「俺の名前は…ナリア」ユベ「モントーラで、間違いないんだよな

…？」

暫し呆けた後、ガレットは一護の肩を勢い良く掴んだ。

「どうしたんだよ！ 言いたいことがあるならはつきり言え！！」

気に食わない顔をしていた。

彼は、ついこないだ破面として「ここ」に迎え入れられた、いわゆる新人だ。だが、新人とは思えないような無礼な言動、軽い態度、そして一見近寄りたがたい険しい顔にはそぐわぬ優しい心。そこが、ガレットは好きだった。いつでもスカしたような態度をとっていないが、心の中では考えて動いている彼が魅力的で、いざ付き合ってみると面白い奴で、今いる破面の中で最も信用できる存在になった。彼にこんな、思いつめたような顔をして欲しくはないのだ。

「抜けねえんだ……どうしても」

「抜けない……？」

一護は、再び頭を抱える。

「いつからか、分からねえ。でも、もしかしたら、ここで目が覚めてから、かも……時々……本当に、時々ただけどさ………凄げえ、変な声がする……」

ユウが小首をかしげる。

「…声？」

「そう、それ！」

一護がユウを指差す。

少年側は、一体何が「それ」なのか分からず、戸惑った。

「いや……逃げえんだ……たしかに、ユウみてえな感じな気もしたけど……違う……でも、少なくとも俺より小っさい……なんだ……？ 分かんなえけど……俺、呼ばれてる……っ……女……？ あ、女かもしれねえ……だけど、呼ばれてるけど……でも……」

イ\*ニ\*……！！

オ\*チ\*……！！

「うっ……！」

思わず吐きそうになって、一護は口許を押さえた。頭がズキズキと痛い。割れた仮面さえも疼いている気がする。

顔色がどんどん悪くなっていく彼を見かねたガレットが、無理矢理一護を立てせる。

「とにかく、バートンとこ行こうぜ！？ あの人なら何とかしてくれる！」

「だ……けど……っ！」

荒い呼吸。これを落ち着かせ、恐らく、困っている事も解決してくれるのは、バートンしかない。

「だけど……」。

「言い知れぬ不安感があった。」

「俺は……行かねえ！」

ガレットの腕を振りほどき、座り込む。

「バカ、そんな体で何言っただよ！」

しかし、彼は諦めずに一護の腕を掴んだ。

行く、いや行かない、と口論が続き、やがてガレットが声をあげた。

「俺はお前を心配してんだよ、ナリア……！！！」

「っ…余計なお世話だ!!!」

「ナリア兄ちゃんっ!!!」

ユウが叫び、ナリアに抱きついた。

「ナリア兄ちゃん、無理しちゃうだよ。ちゃんと言ってよ。ボクたち、不安になっちゃうよ…」

その、幼いながらも純粋な気遣いの言葉が、自然と二人の頭を冷やしていく。

「わ、悪い……」

ガレットは、無理矢理立たせようとしていた手を離した。

「いや…俺も…悪かった…」

一護もうなだれたように力を抜き、手を後ろについて少し目を閉じた。

自分の体に抱きついて、グズグズと泣いているユウを撫でてやる。

「ごめんな、ユウ。大丈夫、俺、元気だから。気にすんな」

「ひうつ…ひうつ……本、当…?」

「おう! なんなら、後でたっくさん遊んでやるからよ!」

顔がグシャグシャになっている少年を見て、心配をかけすぎたと反省しつつ、その涙を一護は拭ってやった。

……よかつたっス…!

「……………え?」

一護が凍りつく。

その様子に、ユウは目を丸くした。

「…どうしたの? ナリア兄ちゃん…」

……………死ななくて……………よかつたっス…!

頭を振り、笑顔を見せてやった。

「悪い、何でもねえよ! じゃ、早速遊びに行くか! ユウ!」

「う…うん！」

二人が突然立ち上がったので、追いかけるはしないがガレットは大声で声をかけた。

「ナリアあ…！！ マジで無茶すんなよー！ 具合悪くなったら言えよなー！！」

一護も、大声で、手を振りながら答える。

「おー！ 分かってるー！ ありがとなー！！」

「ナリア兄ちゃん、速くー！！」

「あ、待てよ、ユウー！！」

走りながら、一護は考えることをやめた。

だが、何か違和感があることに気付いたのは、このときが初めてだった。

それから、ある二人の死神に出会い、その違和感の原点である「何か」は大きく蠢きだすのだが、彼はそのことをまだ知らない。

## SS2 I know? (後書き)

番外編です。

今日は学校で自習室寄ってきたので、家で勉強せずにちょっと更新。突然書きたくなったから書いただけなんですけどねー…。

本編に入る前のお話でしたがいかがでしたでしょうか。

一護はやっぱりどこかで違和感を覚えているのですね。

ここではガレット、バートン、ユウという破面がいるということしか分かりませんが、実はあと二、三人いたりします。それは本編が進めばきつと顔を出してくれるでしょう。

気まぐれに書いた、ちょっと残念な番外編でした。

SSS G O ' m y n e w p l a c e . ( 前 書 き )

「Beginning is ZERO of number.2」  
辺りで、浮竹が十三隊を離れ、零番隊に行く決意をした翌日のお話  
です。

まだ、朝日は昇っていない早朝。

静霊廷は静かで、薄暗い空間となっており、妙に冷えているように感じられる。

普段から床に伏すことの多い彼が、ここまで早起きをするのとはとても珍しいことだ。しかし、約束の時間を考えると、あまり余裕はない。

雨乾堂つげんどうの中で、幾度か深呼吸をする。

死覇装だけに身を包む彼を、他の死神が目にするれば大きな違和感を感じずにはいられないだろう。

部屋の隅に、丁寧に畳んだ十三番隊の隊首羽織を、邪魔にならないように置く。

「ふう……」

憂鬱であるわけではない。しかし、気を抜けば溜息が何度でも漏れた。

「行くのかい？」

慣れ親しんだ声が響く。

振り向くと、戸口のところにも、“親友”ともいえる存在が立っていた。

「ああ。決めたことだからな」

「そりゃあ、淋しくなるねえ、どうも」

残念そうでもなく、編み笠をあげながら言う。

そんな彼に、浮竹は苦笑した。

「王属特務に行くのを勧めたのは、お前だろうか？」

「僕だったらそうする・って言ったただだよ。決めたのは浮竹自身じゃない」

一瞬、考える仕草をしてから、

「そうだな」

浮竹十四郎はあっさりと首を縦に振った。

「あれ？ 素直だねえ」

笑いを噛み殺し、京楽春水は一度、外に目をやる。

彼の様子を見つつ、今まで使ってきた文机などに、名残惜しそうに触れた。

「見送りに来てくれたのか？」

「まあね」

「そうか。ありがとう」

開けられたままの戸口から、冷たい朝の風が流れ込んできて、長い白髪を揺らす。

「あの子達には言わなくていいのかい？」

ふいに言われ、動きを止める。

「……清音と仙太郎のことか？」

「あと、ルキアちゃんも」

現在投獄されている、元十三番隊隊士のことを思い出す。彼女とは、隊から離れてからもずっと手紙でやりとりをしていた。しかしついこないだ、勝手に行方不明になった黒崎一護の魂魄の探索に向かい、強制帰還させられたのだ。牢屋に入ってからルキアのこと、何も知らない。

別れを告げるついでに、どうしているのか様子を見にいききたい気はした。

しかし浮竹は、迷う素振りさえも見せず、首を横に振った。

「情けないが、そういうことをすると、決意が揺らぎそうなんだ」

何せ、百年以上も居座り続けた隊だ。離れたくない思いは、あつて当たり前だった。

この隊で、沢山のことがあり、沢山の死神に出会った。

志波海燕という死神と関わり、朽木ルキアという死神を迎え、そして、いつもその両脇には、虎徹清音と小椿仙太郎がいた。笑顔の絶えない、隊だった。

命を護るための戦いと、誇りを護る為の戦いを基盤に、皆で一つ

になってこれたのは、十三番隊だったからだ。

だから、昨日の夜、突然に隊士を集めて、「零番隊に行くことになった」ということも受け止めてくれたし、後から隊長となる浦原喜助についていくということも、分かってくれた。……皆、淋しそうに顔を歪めてはいたけれど。

「…喜助くんになら、任せられる」

独り言のような言葉を聞き、京楽は口許に笑みを浮かべる。

「そうだね」

頷くと、外に出て端に寄る。

開かれたそこを通り、浮竹も外に出ると、京楽に向き直った。

「じゃあ、行ってくる」

「ん。行つてらっしゃい」

肩を竦める。

いつも、任務に行く時と全くもって同じやりとりだ。お互い、これは最後だと、思っていない。

寧ろ、始まりだ。

浮竹は、踵を返して歩き去っていった。

一人になった京楽は、何気なく雨乾堂の中を覗き込む。ガラン、としたその部屋の中は、まるで新たな主を待つかのように、ひっそりとしていた。

あのときと同じように、“蛆虫の巢”を訪れ、危険分子として収容された者達の猛攻をいとも容易くぐりぬけ、奥にある見えにくい扉を開き、中に入る。階段を下りていき、天井の高い大広間に足を踏み入れた。

カッソ。

草履であるにも関わらず、小気味良い音が立ち、響き、反響する。  
「おかえり」

凜とした声が聞こえ、足を止めた。

相変わらず、ここは青白い光が、遠い天井と床の端から少し照らされるばかりで、顔が見えにくい。しかし、女で、ここにいないといえ、一人しか思い当たらない。

「……曳舟……」

「どうするか…決めたんでしょう？」

まあ、と付け足す。

「その格好じゃ、訊くまでもなさそうだけど」

隊首羽織を置いてきているということは、隊長の座をおりることを意味する。

金の刺繍が施された、濃い灰色の羽織を纏う桐生は、微笑んだ。

「歓迎するわ。浮竹」

「…今度はお前と行動するのか。昔に戻ったみたいだな」

元々、桐生は浮竹と京楽の彼女の成績はすば抜けて良かったのだが、同期だった。彼女が十二番隊隊長を屋っていた頃、必然的に共に行動することは多かったのだ。最も、それも百年以上昔のこととなってしまうただけだ。

「そうね。私も、何だか新鮮」

「よろしく頼む」

「こちらこそ。さ、ついてきて」

歩みを刻み始めた桐生を追い、浮竹も奥へ進む。

地下にある“蛆虫の巣”から更に階段で下へと下がり、先ほどまでいた大広間に着く。そこから奥へ奥へと続く長い廊下を歩き続けているが、終わりは見えず、ただ機械的に足を進めるのみ。だが、それにしてもあまりに長い廊下なので、浮竹はつい尋ねた。

「王土へ行くのに、こんなに奥へ進むものなのか？」

「まさか。このまま行つて、王土に着くわけないわよ。ただ、王土に通じる門みたいなのが、この先にあるだけ」

青白い光に照らされて、灰色のはずの彼女の羽織が、なんだか違う色に見える。

今一つ腑に落ちない様子で首を傾げる浮竹を見やり、少し思案顔になつて、徐に口を開いた。

「えつとね。ここ、ちよつとした仕掛けがあるの。隊長格くらいにならないと、失神するくらいの霊圧は常に高濃度で満たされてる。まあ、今回は陛下に予め、あなたの体が弱いことを伝えてあるし、いつもよりは薄いかもしれないけど」

そこでようやく納得がいった。たしかに、歩いていくにつれ、ほとんど体が重くなつていくような感覚はあつた。ということは、ここを歩ききれない者は、王土という神聖なる場所に足を踏み入れる資格はまずないということなのだろう。いわば、試練の廊下というわけだ。

「案外、こういうところは盲点だね。王土に通じる入口が、まず初めに“蛆虫の巣”にあるつてこと、驚かない？」

「驚くよ。でも、どうしてあんなところに、王族関係の重要な場所を作つたんだい？」

この、“蛆虫の巣”の裏側にあるような空間に入るにあたって、浮竹が開いた見えにくい扉は、鍵こそ何もなくて、本当にただ「見えにくい」だけなのだ。一歩間違えば、危険分子と見なされた彼等の中の誰かが、ここに侵入することも有り得るように思えた。

「警備の代わりよ」

あつさりと答え、突如、足を止める。

振り向いて、手を差し出してきた。

「斬魄刀」

「ん？ あ、ああ」

慌てて腰帯から斬魄刀を抜き取り、桐生に手渡す。

彼女はそれを持って、僅かに目を細めると、片手で斬魄刀の柄と

鞘に触れた。刹那、斬魄刀が金色に輝き、それはすぐに消えた。

「はい。王土の王宮に入るまでは、我慢して」

「分かった。…何をしたんだ？」

とくに変わった様子はない、自らの斬魄刀を眺め、首を傾げる。

「あなたが妙なマネをしなければ、何も起きないわよ。王土はそれだけ神経質ってことね。あまり良い言い方ではないけど」

そして、改めて歩き出す。

「話の途中だったわね。どこまで話したっけ」

浮竹は、腰帯に斬魄刀を携えなおしながら答える。

「警備の代わり、と言っていたが」

「ああ、そうそう。そうなの」

青白い光ばかりであった空間に、エメラルドの光が方々から差し込む場所が、区間を置いて二度、三度とやってくる。何か違いでもあるのだろうか、と浮竹の疑問は増えるばかりだ。

「王土は、王家の者、王宮の者に、王属特務の、霊王陛下を護る為の空間。エリート部隊だったことは誰もが知ってることだと思っけど、はつきり言えば人員不足ね。そんな天才が、ポンポンいるわけだし、“外”を護るにしても、そっちに人数を回せない。だから、危険分子の彼等が大暴れできる、“蛆虫の巣”に入口を作った。つまり、彼等は私達にしてみれば、丁度いいところにいる兵士なのよ」

人員不足…。

口の中で、今聞いた言葉を再度転がしてみても、顔を上げる。

「だが、人員不足なら増やすことはできるんじゃないか？ 京楽は俺より優秀だし、日番谷隊長は滅多にお目にかかれない天才だ。朽木隊長も、王族とは何かしら関わることが出来る朽木家の当主。彼等を零番隊に引き入れないのはどうしてだ？」

「欠点があるからよ」

また、即答だった。

「京楽の優秀さは、護廷十三隊にいてこそ発揮できるものなの。王属特務にいるべき存在とはいえない。寧ろ、彼の居場所は護廷むていなの。

日番谷冬獅郎はまだ経験も性分も若すぎるわね。私情を捨てきれないのが決定的なところよ。白哉くんは、朽木家の当主だからこそこちには呼べない。正直、王土側としても、朽木家はいてもらったほうが何かと役に立つからね」

そこで、桐生が再び足を止める。

まだまだ廊下は奥へと続いているようで、その先は闇となっており、見えない。

「着いたわ。門」

「…？」

訝しげに眉を顰める。

桐生がゆっくりと手を差し出すと、何も無いようであった目の前がポウツと輝きを放ち、壮大な門が目の前に現れた。

あまりのことに、言葉が出ない。

「浮竹。王土はあなたを受け入れるらしいわ」  
振り向き、浮竹に笑いかける。

ギイ……ギイ……

錆び付いたような音を立てながら、門がゆっくりと開かれ始める。そこから、光が漏れてくる。

「よじこぞ」

我らが  
“王土”  
へ  
。

SSS Gomy new place . (後書き)

番外編、久しぶりの更新です。

浮竹が零番隊へ行く際の物語でした。

彼が曳舟さんから「零番隊に来て」とか、重要そうな話を聞かされた場所が“ 蛆虫の巣 ” にあった、というのはこういうのが理由でした。

つまりは危険分子の子達、利用されてるんですね。

こうい言うい方すると王土が凄いい感じになるので、「有効活用している」と言っておきます。

勿論ですけど、この王土設定は完全捏造です。だから設定が甘いところもありますが、気づくことができたなら追々直していくつもりですので…！

感想等ありましたら是非お願い致します。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6308w/>

---

die and locus \* side stories \*

2011年12月26日01時46分発行